

平成30年度第2回千葉県地域リハビリテーション協議会
開催結果概要

- 1 日時 平成31年3月13日(水) 午後2時～3時50分
- 2 会場 千葉県教育会館 203会議室
- 3 出席者 協議会員総数16名中13名出席
相澤雅則氏、荒井泰助氏、岩本明子氏、上田知成氏、内山弘子氏、大野由記子氏、
小宮あゆみ氏、中頭賢志郎氏、戸村由美子氏、平山登志夫氏、茂木優希氏、
山崎潤子氏、吉永勝訓氏(50音順)
- 4 会議次第
 - (1) 開会
 - (2) あいさつ
 - (3) 議題
 - ア 地域リハビリテーション広域支援センターの指定(選定)について
 - イ 平成30年度千葉県リハビリテーション支援センター及び地域リハビリテーション
広域支援センターの活動結果について
 - (4) 報告
 - ア 「ちば地域リハ・パートナー」の指定状況及び協働状況について
 - イ 地域リハビリテーション出前講座の実施結果について
 - (5) その他
 - (6) 閉会
- 5 会議結果概要
 - (1) あいさつ
海宝健康づくり支援課長よりあいさつ
 - (2) 議題
 - ア 地域リハビリテーション広域支援センターの指定(選定)について
資料1を用いて事務局より説明し、続いて千葉圏域のおゆみの中央病院、印旛圏域の
成田リハビリテーション病院より、それぞれの事業計画等について説明があった。
 - イ 平成30年度千葉県リハビリテーション支援センター及び地域リハビリテーション
広域支援センターの活動結果について
県支援センター及び各広域支援センターより、資料2を用いて説明があった。
<吉永会長>
例年にも増して、活動が活発になってきていることが伺える。パートナーとの協力関係
もうまくいっていると思われる。
<荒井協議会員>
各広域支援センターにおいて、さまざまな取組が行われているが、新しく指定される
広域支援センターが最初から同じように取り組むことは難しいと考えられる。
今の広域支援センターも、始めからこれだけの取組がされていたのではなく、年に何回
も集まって意見交換や情報共有をして、いろんな進化をとげてきた状況がある。
新しく広域支援センターとして指定されたところには、そうした意見交換や情報共有の
場をどのようにしていくのか。
また、パートナーは、新しく指定される広域支援センターのことも知らないはずなので、
今後、どうかたちで情報共有していくのか。
<吉永会長>
新しく広域支援センターになったところには、県支援センターから現在の広域支援セン
ター全般の取組について、説明や必要な助言・指導を行ってきている。

<県支援センター>

市原圏域の白金整形外科病院や山武長生夷隅圏域の九十九里病院が新しく広域支援センターになった時には、意見交換しながら県支援センターも一緒にやってきた経緯がある。

新しく広域支援センターになられたところには、それぞれの考えもあると思うので、必要性を勘案しながら協力していきたい。また、全体としての意見交換会も引き続き実施していきたい。

今後は、9圏域と県支援センターで事業全体としての成果を出せるようにしたいと考えているところであり、評価指標についても考えていきたい。

パートナーについては、圏域ごとにさまざまな取組があるが、こちらについても同様に意見交換や情報共有を引き続き進めていきたい。

<事務局>

新しく選定されたところについては、地域をみてこれからこのように進めていきたいという事業計画を立てていることから、取組のイメージは既にもっている。県としてはそういったところを支援していきたいので、県支援センターの協力によりリードしていただきつつ、県も一緒に入ることができるだけのことはしていきたい。

<上田協議会員>

山武長生夷隅圏域と市原圏域の活動は、人の派遣など活発な活動をしており、予算的に非常に厳しいのではないかとと思われるが、どのように取り組んでいるのか。

<市原地域広域支援センター>

パートナーと一緒に活動しているものもあるが、多くは平日の昼間での活動になるため、実際のところ施設としての理解を得て、地域の方々に参加してもらうのは難しい現状がある。そのため職場の理解を得て、自施設で実施している状況である。

<山武長生夷隅地域広域支援センター>

職場の理解を得ることが、まず前提として必要である。

圏域の17市町村の中には、予算化して講師料を手当しているところもあるが、それを派遣するリハ職の件費として比較計算してしまうと、経費が予算を超えている現実はある。自施設の経営陣はそのような見方ではないため、理解は得られている。

(3) 報告

ア 「ちば地域リハ・パートナー」の指定状況及び協働状況について

資料3を用いて事務局より説明。

イ 地域リハビリテーション出前講座の実施結果について

資料4を用いて事務局より説明。

<相澤協議会員>

出前講座について、子どもたちにこういう経験をさせることは、重要な取組だと考えられる。

こうした講座を受けた子どもたちからは、より一層、興味をもって理解を深めたいという声もあるので、広域支援センターの方で手が足りないなどの状況がある場合は、他団体と連携を図るなど、やりっ放しにならないようにしてほしい。引き続き事業の継続をお願いしたい。

<荒井協議会員>

出前講座について、さまざまな内容があるが、どこまでマニュアル化されているか。

また、学校以外にも取組を広げていくのか。

<県支援センター>

マニュアル化については、学校がどういう意図をもって申し込んでいるかによって対応が変わるため、難しいところがある。例えば小規模の学校が4, 5, 6年生を対象に合同で申し込む場合と、大規模の小学校が5年生だけを対象に申し込む場合とでは、やはり対応の仕方が変わる。

そういう中で最低限のレベルで、こういうことをやる、こういうことを伝えるというようなマニュアルを、広域支援センターの意見を聞きながら今後検討していきたい。

<事務局>

この取組は、県支援センターでモデル事業的に2年やって、今年度から広域支援センターが主となって実施している。

実施要領の中では、車いす体験を掲げて募集しているが、取組の実態を見ていくと、学校側からの要望と広域支援センターの対応力の広さにより、高齢者疑似体験やリハスポーツなどのさまざまな体験が行われた。

こうしたさまざまな取組を一つにまとめて考えるのは難しい面があり、また地域の要望に応じていくという意味ではさまざまな形があってもいいと考えているが、地域リハを伝える視点で1つの線がやはり必要で、そういうところを県支援センターと広域支援センターと意見交換しながら考えていきたい。

(4) その他

<小宮協議会員>

取組について、活動内容が広がっていることに興味した。

歯科医師会の関係では、この取組にはパートナーとして参加していくことが想定される。広域支援センターとパートナーとの協働以外のところでどういう連携が広がっているか確認したいところだが、来年度に報告いただけるとのことなので、よろしく願いたい。

<大野協議会員>

保健所では特定疾患や神経難病などで、リハビリ関係の方々と協力して取り組んでいるところもある。今後の活動でも協力をお願いしたい。

<吉永会長>

全国的にみるとこの事業は保健所の協力を得ながら実施しているところも多い。引き続き協力をお願いしたい。

<中頭協議会員>

前回の協議会でも就労とか企業を通じてリハビリテーションを伝えていくことについて発言した。地域リハビリテーションを進める中で、事業の広報について、企業とか就労というものに結びつけるため、広域支援センターの今の活動を知らせて、そこに参加していただくとか、圏域の実情に合わせた取組をお願いしたい。

<吉永会長>

国が提唱している地域共生社会という考え方に結びついていく話であり、将来に向けての取組として広域支援センターでも検討していただきたい。

<岩本協議会員>

職能団体として、広域支援センターとの連携を強化していく必要があると感じている。広域支援センターのSTがどのような役割で活動しているか、なかなか見えない現状がある。今後は職能団体と広域支援センターのSTとで、地域リハに関する会議を持ちたいので、STの派遣をお願いしたい。

<事務局>

本協議会でいただいた御意見を踏まえ、今後の取組を進めたい。平成31年度第1回協議会については、10月頃に開催予定の旨説明。